

—先生は文学教育がご専門ですが、学生時代はどのように図書館を利用されていましたか？

学生時代は、研究の資料を集めるために図書館をよく利用していました。現代小説の教材性についての先行研究は少ないですし、まとまった研究もまだないので、雑誌でのインタビュー記事や特集など、その作品や作家に関する資料はどんな小さなものでも手に入れたいものです。記事の名前さえわかれば大学図書館を通じて全国の図書館資料を請求できたので、とても助かりました。

—どんな本をよくお読みでしたか？

深く印象に残っているのは、江國香織や川上弘美、多和田葉子の作品です。例えば、くまに誘われて散歩に出るお話\*1や、きゅうりと帽子と数字の2がホテルカクタスという名のアパートに住んでいるお話\*2など、童話のような設定ですが、きちんとさめた言葉で書かれているところにはっとさせられました。映像化される小説も多いなか、言葉でしかできないことをしていると感じられる作品に惹かれるのだと思います。フィクション（虚構）はファクト（事実）ではありませんが、フェイク（偽物の現実）でもない、ある種の真実だと認めざるをえない、そう感じさせる文体（言葉の肌理）に触れている時間が好きです。

—先生にとって「読書」という体験はどのようなものですか？

小さいとき、本は誕生日やクリスマスに両親から贈られるものでした。また、通学時の車内や病院での待ち時間の友でした。読書は、別の世界に深く入りこむ体験だと思っています。文学に限らず、読書は書かれている世界への没頭をもたらしてくれます。もちろん、すべての本でそうなるわけではありません。私は妹と本を共有していましたが、私がまったくそそられなかった本を妹が真剣に読んでのを見ると、とても不思議に感じました。読書という体験は、とても個人的で、個性的なものでもあると思います。

本を読むとき、読者は書き手や語り手の目を通して世界や他者の断片をみつめます。自分の目（言葉）を離れて得る自由がそこにはあるでしょう。私たちは世界や他者の断片に自分の感覚や考えを重ね、共感したり反発したりすることで世界や他者を理解していくと同時に、自分を理解してもいきます。世界や他者のまえに自分が相対化され、解きほぐされるからです。

コロナ下でベストやスペイン風邪など感染症について書かれた作品\*3が話題になりましたが、2019年までならこれらの作品を寓話やSFのように読んだかもしれません。しかし、いまの私はそうは読めない——そのことを感じながら読むとき、〈私〉を読むことにもなっていると思います。

—先生の著作の中に、書物の「読み」とは「一回一回がかけがえのない「出来事」」という印象的な表現がありました。

「文学という出来事（The Event of Literature）」はイギリスの文芸批評家や哲学者のT・イーグルトンの言葉です。同じ楽譜でも人によって演奏が違うように、同じ本でも読者が違えば読みが異なります。それだけでなく、同じ奏者が二度と同じように弾けないように、読みもまた一回性のものです。一度読んだ本を再読することは可能ですが、まったく同じように読むことは不可能です。昨日の私と今日の私は違うのですから。また、どんなに練習しても昨日より今日の方がうまく弾けるわけではないように、努力で完全にコントロールできるものでもありません。その〈ままならなさ〉に楽しみがあります。

—では、読書生活の充実のために、私たち読者が心がけること、特に図書館の活用方法についてアドバイスをいただけますか？

読書は一回性の出来事(event)である、そしてその出来事は私が参加しなければ始まらない、だからとりあえず本を読もうと心がけることはできそうです。

図書館に足を運べば、本を読んでいる



教育学部准教授  
鈴木 愛理  
SUZUKI Eri

愛知県生まれ。専門は、国語教育・文学教育。趣味は器楽演奏（コントラバス）で弘前市内を中心に活動している。

人の姿に出会えます。コンサート会場や映画館でも同じ時間や空間を共有している喜びがあると思いますが、読書に関しては図書館がそれにあたるのではないのでしょうか。読書は孤独な営みに見えるかもしれませんが、だからこそ本を読む人がいるということが安心感や励みになることがあります。

インドの図書館学者、S.R.ランガナタンが著した『図書館学の五法則』には、第三法則として「いずれの図書にもすべて、その読者を」と記されています。すべての本には、それぞれその本にふさわしい読者が存在している、よって図書館（司書）は本と読者とを結びつける何らかの方法を模索すべきであるという主張ですが、図書館の利用者が第三法則に応えたいという心持ちをもつことも大切かもしれません。どの本も読者を待っているのだ、と。

ランガナタンによれば、これまで図書館が採用した方法のなかで最もすぐれているのが開架制です。利用者は自分のもののように自由に本を手にすることができ、本を選んだり、発見したりする楽しみがあります。書架上の本の背表紙をざっと眺めたり、本や雑誌の中身を拾い読みすること、求める情報を偶然みつけたり、新たな情報に出会うことをブラウジング(browsing、牛などが若葉や新芽を食べる意)といますが、それを期待するのとならないのでは、図書館の歩き方が変わってくるように思います。

(聞き手：広報委員 須田)

\*1) 川上弘美『神機』

\*2) 江國香織『ホテルカクタス』

\*3) カミュ『ペスト』、志賀直哉『流行感冒』など